

## マックス・ヴェーバーと「近代文化」

## —『倫理』論文は何を問うのか (3)—

三笥 利幸<sup>i</sup>

ヴェーバーが『倫理』第1章第2節で示す「資本主義の「精神」」は、あらかじめの定義を拒む「歴史的個体」であり「発生的 genetisch」な理念型である。そこで、その暫定的な例としてベンジャミン・フランクリンが取りあげられる。そしてこのフランクリンの例示が、さまざまな誤解を生み出している。ヴェーバーは、宗教とは直接的な関係のない人物としてフランクリンを取りあげているのだが、それにもかかわらず、フランクリンと宗教なかんずくカルヴィニズムとの関係が強調する議論は、『倫理』翻訳者である大塚久雄に特に顕著に見られる。すなわち、フランクリンの示す「資本主義の「精神」」を価値的に勝れた「エートス」と評価し、そこにカルヴィニズムとのつながり、さらに、隣人愛の実践を見出だそうとするのである。このフランクリンとカルヴィニズムとのつながりを前提してしまう誤解は今に続くが、その要因の一つに、ヴェーバーがフランクリンの言葉をフェルディナンド・キュルンベルガーの小説『アメリカにうんざりした男』から孫引きしていることを無視している事実が挙げられよう。この小説では、フランクリンの言葉の宗教的な部分が削除され、徹底的に拝金主義的に再構成されていて、それをほぼそのままヴェーバーは『倫理』に引用している。こうしたフランクリンを理念型として、ヴェーバーはフランクリンに「信用のできる誠実な人という理想」, 「自分の資本を増加させることを自己目的とすることが各人の義務だという思想」を見るのである。

キーワード：ヴェーバー, 『倫理』論文, プロテスタンティズム, カルヴィニズム, フランクリン, 資本主義の「精神」, 歴史的個体, 理念型, キュルンベルガー

目次	「過補償説」
はじめに	2-5. 信仰の内面的特性についての漠然とした「社会通念」
1. 『倫理』の問題設定に対する誤解	2-6. 古プロテスタンティズムと資本主義文化の直接的な内面的親和関係の探索
1-1. 誤解の流布	(以上第55巻第3号)
1-2. 『倫理』初版への誤解, 批判, 反批判, そして『倫理』改訂 (以上第55巻第2号)	3. 資本主義の「精神」——鍵概念の準備 (1)
2. 『倫理』第1章第1節の論理構成	3-1. 定義を拒む概念——「資本主義の「精神」
2-1. 信仰と社会層分化への注目	3-2. 宗教的色彩を帯びたフランクリンという誤解
2-2. 経済を原因とする「一般解放説」	3-3. 大塚久雄によるフランクリンと宗教の連結
2-3. 教育によって得られる精神的特性への注目	3-4. キュルンベルガー『アメリカにうんざりした男』に登場するフランクリン
2-4. 外的状況から形成される精神的特性——	

i 立命館大学産業社会学部教授

3-5. 貨幣獲得と倫理の同時存在 (以上本号)

3-6. 「職業義務」思想における「合理性」と「非合理性」の同時存在

4. ルターの職業概念——鍵概念の準備 (2)

5. 『倫理』の問題設定とは

おわりに

### 3. 資本主義の「精神」——鍵概念の準備 (1)<sup>33)</sup>

『倫理』第1章第1節で、問題のありかが確定された。では、すぐに『倫理』の問題設定へと進めるのかというと、そうではない。いま見いだされたのは、「古プロテスタンティズムの精神」と「近代の資本主義文化」との間に「内面的親和性」があるということだけである。

すでに一度引用したが、あらためてヴェーバーが述べた『倫理』の結論を引いておきたい。

近代資本主義精神の、それだけでなく、近代文化の本質的構成要素のひとつというべき、職業理念を土台とした合理的な生活態度は、キリスト教的禁欲の精神から生まれたのだ。本論考はこのことを証明しようとしてきたのだった。[MWGI/18: 484-5=大塚訳: 363-4]<sup>34)</sup>

この結論を読めば、キリスト教的禁欲の精神から生み出されたのは、「合理的な生活態度」なのだが、それは、「近代資本主義精神の本質的構成要素のひとつ」であり、また、それは「職業理念を土台とし」ていることがわかる。つまり、この結論へ至るためには、「資本主義の精神」および「職業理念」というふたつの概念についての準備が必要であり、それらをヴェーバーは第1章第2節および第3節で論じるのである。逆にいえば、これらを論じないままでは、『倫理』の「問題設定」には至れないのである<sup>35)</sup>。

#### 3-1. 定義を拒む概念——「資本主義の「精神」」

『倫理』第1章第2節の表題でもある「資本主

義の「精神」は、ヴェーバー自身がいうように、「いづらか意味ありげな響きのある概念 etwas anspruchsvoll klingende Begriff」[MWGI/18: 148=大塚訳: 38]である。この概念の意味をどう解すればいいかと、ヴェーバーは自問してみせる。そのあとに現れるのは、ヴェーバーを読む者にとっては他でも見たことのある、しかしそれは、決して一般的ではない言明である。「資本主義の「精神」」という表題の付いた節であるにもかかわらず、ヴェーバーは「その最終的な概念把握は研究の最初にできるものではなく、研究の結末においてなされなければならない」[MWGI/18: 149=大塚訳: 38-9]と述べるのである<sup>36)</sup>。

通常、先に明確な概念の規定がなされるからこそ、それ以降の議論ができるというものだろう。しかし、ヴェーバーは概念を定義せず、さらには概念定義は研究の最後にならないと不可能であるとすらいう。それは、「資本主義の「精神」」が「歴史的個体」であり「発生的 genetisch」な理念型だからである[MWGI/18: 149-50=大塚訳: 38]。このことについての詳細は、ヴェーバーの理念型論<sup>37)</sup>に立ち入って論じなければならないが、ここでは簡単に指摘するにとどめたい。ヴェーバーのいうとおり「歴史的個体」は、歴史的現実のなかにある意味連関、因果連関からその構成要素を用いて漸次に組み立てていくものである[MWGI/18: 149=大塚訳: 38]。その構成要素のひとつひとつを確定し、組み立てていく作業がこれから始まるのであって、いまの時点では組み立てるための素材は存在していないのである。

しかし、当該概念についてまったくの手がかりなしで議論を進めるわけにもいかない。そこで、ヴェーバーは定義ではなく「暫定的例示 eine provisorische Veranschaulichung」[MWGI/18: 150=大塚訳: 39]として、ベンジャミン・フランクリンのことばを利用する。その理由をヴェーバーは以下のように述べている。

この資料(フランクリン——引用者)は、ここでまず

重要なものをほとんど古典的な純粋さで内包しており、同時に宗教的なものへのあらゆる直接的な関係から切り離されているために——われわれのテーマにとって——「予断が入らない voraussetzunglos」という長所がある [MWGI/18: 150=大塚訳: 40]<sup>38)</sup>

ヴェーバーはフランクリンによって理念型を示せば、そこに「予断が入らない」と想定している。しかし、実際のところ、これが予断を誘発し、読者に混乱を引き起こしている。

誰にも知られていないような人物ならまだしも、フランクリンという有名な人物を例とすれば、読み手としては何らか直観的に思うところがあってもおかしくない。ましてや、フランクリンに造詣の深い研究者は、よけいに一家言あるだろう。いずれにせよ、そこで想起されるフランクリンは、すでに自分が知っているフランクリンである。これが、予断 Voraussetzung をもって「資本主義の「精神」」が理解(誤解)されていくきっかけともなっている。すなわち、ヴェーバーが提示するフランクリンは、自分の知っている本当のフランクリンとは違うという批判<sup>39)</sup>がおこったり、あるいは、ヴェーバーはフランクリンのことばの一部しか引用、言及していないが、自分の知っているそれ以外のことばを含めて理解すれば、しっかり「資本主義の「精神」」が定義できるという短絡的思い込みがおこったりしている。そうした批判や思い込みが当人にとってどれほど納得のいくものであっても、そうするために、『倫理』で何が議論されているのかについてはまったくの誤解へと向かってしまうのである。

### 3-2. 宗教的色彩を帯びたフランクリンという誤解

ヴェーバーが「暫定的」な例としたフランクリンは、「宗教的なものへのあらゆる直接的な関係から切り離されてい」て、かつ、「資本主義経済なしの「資本主義の精神」 „kapitalistischer Geist“ ohne kapitalistische Wirtschaft」 [MWGI/9: 602] の理念型なのであった。宗教とも資本主義経済ともかかわ

らないからこそ、ヴェーバーはフランクリンによって「資本主義の「精神」」を古典的と呼ぶほど純粋に示すことができると考えたのである。ところが、こうした位置づけを理解しないまま、自分の知っているフランクリンで「資本主義の「精神」」を理解し、解説が書かれることが多々ある。たとえば、大澤は次のようにフランクリンについて語る。

フランクリンは、「時は金なり」という言葉で知られている人です。フランクリンには、仕事をミッションと見なす思想がある。つまり、倫理的な職業義務の思想が、フランクリンのほうに(だけ)はあるのです。だから、儲からないことをやったとしたら、単に「損をした」のではなく、「倫理的に間違ったことをやった」という自覚をもつことになります。「時は金なり」という命題は、時間を無為に使うと損をするということ以上の意味があります。非生産的な時間の使用には、何か倫理的に大きく間違った点がある、という感覚があるのです。

利潤を追求する職業に、何か宗教的な意味が宿っているのです。要するに、資本主義の精神とは、正当な利潤を「天職(召命)」として合理的に追求する心情です。[大澤 2019: 331-2] (傍点は引用者)

大澤は、フランクリンの利潤を追求する職業に、「何か宗教的な意味」を認めている。それは「天職(召命)」ということばに込められた意味からもわかるということなのだろう。しかし、この説明は、ヴェーバーが「宗教的なものへのあらゆる直接的な関係から切り離されている」と述べていたところと明確に矛盾する。ただ、このようにフランクリンに「宗教」を読み込むのは大澤に限ったことではない。伸正は次のようにひとまず解説する。

ヴェーバーは、「資本主義の精神」に対応するプロテスタンティズムの教理として、カルヴィニズムの「職業」観に注目する。フランクリン自身は、人格神ではなく、自然界の法則性のようなものを神とし

て信じる理神論の信奉者であったが、彼の父はカルヴィニストで、カルヴィニズムに独特の「職業」観を持っていたという。[仲正 2014: 29]

このあとで、仲正はこの箇所を「先に参照した、フランクリンに対するカルヴィニズムの影響を論じた冒頭部の記述」[仲正 2014: 68] (傍点は引用者)と述べている。やはり仲正もフランクリンに「宗教」を、なかならずカルヴィニズムを読み込んでいるのである。

大澤や仲正がフランクリンにカルヴィニズムの痕跡を見出すことには、理由がないわけではない。後でまた論じるが、フランクリンには「ある種の宗教的表象」と関連があろうことをヴェーバー自身が述べていて [MWGI/18: 160=大塚訳: 48]、そして、次のようにいうからである。

なぜ「人から貨幣をつくら」ねばならないのかと問われれば、ベンジャミン・フランクリンは、彼自身の教派にも属さない理神論者なのだが、自伝のなかで聖書の句——この句は、彼いわく厳格なカルヴィニストの父が青年時代にくり返し教え込んだものだ——で、こう答えている。「あなたはそのわざ Berufに巧みな人を見るか、そのような人は王の前に立つ」と。[MWGI/18: 160=大塚訳: 48]<sup>40)</sup>

なるほど、「厳格なカルヴィニストの父」をもつフランクリンであり、その父から教え込まれた聖書の句をフランクリン自身が使うとなれば、彼にカルヴィニズムの影響を見たくなるのはわからないわけではない。しかし、ヴェーバーがしっかり彼は理神論者だったと書いているし、少なくともカルヴィニズムと断絶していることは、『自伝』の以下のところにもはっきり現れている。

私は長老派教会会員として宗教的な環境のなかで育った。この派の教義の中には、「神の永遠の意志」「神の選び」「永罰」など、私には理解不能なものや

信じられないものもあったが、……宗教上の主義をまったく持たないわけではなかった。例えば、神の存在、神が世界を創造したこと、神の摂理によってこれを治めること、そして、神のもっとも受け入れるべきわざ service は、神は人に善を行うということ、人間の魂は不滅であること、さらに、この世でそして来世で、すべての罪は罰せられ、善徳は報われることなどについては、私は決して疑ったことはない。これらはすべての宗教の本質であると考え、そしてわが国のすべての宗教に見出せることであって、私はそれらすべてを尊重したのである…… [Franklin1: 324-5=松本・西川訳: 133-4]

フランクリンは、カルヴィニズムの予定説のような「神の永遠の意志」「神の選び」「永罰」など信じられないと述べており、また、特定の宗教の「神」を信じているわけでもないといっている。それでも、フランクリンにカルヴィニズムを読み込んだ理解が生まれるのはなぜだろうか。おそらくその原因のひとつは、『倫理』の訳本として現在最も利用されている大塚訳とそこににじむ思想とにあるように思われる。

本稿では、最近5年程度のヴェーバーに関する新書や解説書を特に取り上げるという方針をとった。しかし、どうもその新書や解説書への大塚の影響は無視できなさそうだ。そこで、以下では大塚久雄の翻訳およびその背後にある思想を検討しておきたい。

### 3-3. 大塚久雄によるフランクリンと宗教の連結

『倫理』には、「時間は貨幣だ」に始まるフランクリンのことばが引用されている [MWGI/18: 151-4=大塚訳: 40-4]。ヴェーバーによれば、その引用は Advice to a Young Tradesman および Necessary Hints to Those That Would Be Rich からなされている [MWGI/18: 154=大塚訳: 44]。奇妙なのは、——この事情をヴェーバーはしっかり記しているのだが——最後の一段落を後者から、それ以外は前者から (部分的に脱落させつつ) 引用しながら、それ

を区別のできない一続きの引用としてしまっているということだろう。いい換えれば、これはフランクリンの原典からのそのままの引用ではなく、再構成された文章なのである。こうしたところから、ヴェーバーの引用は、不正確で恣意的だ、フランクリンを誤解している／誤解させる、といった批判がなされてきた。そして、そうした批判を行いつつ自身の『倫理』解釈を示したのが、大塚久雄であった。

大塚の研究のなかで、『倫理』がきわめて大きな位置を占めていたことは衆目の一致するところだろう。さらに、彼が『倫理』の特に関心を向けていたのかを見ていくと、それは間違いなく「資本主義の「精神」」なのである。

大塚は、戦中期から戦後直後にかけて『経済学論集』に論文「マックス・ヴェーバーに於ける資本主義の「精神」——近代社会に於ける経済倫理と生産力 序説」[大塚 1943] [大塚 1944] [大塚 1946]を投稿した。これは未完に終わったのだが、副題を削除した上で書き改め、完成稿とした上で再度『経済学論集』に投稿し [大塚 1964] [大塚 1965a]、すぐに大塚はじめ4名の論文集『マックス・ヴェーバー研究』に収録した戦後ヴァージョンがある [大塚 1965b]。大塚が、戦中から戦後にかけて「資本主義の「精神」」にこだわり続けていたことが端的にわかる論文である<sup>41)</sup>。

大塚は、ヴェーバーのいう「資本主義の「精神」」*«Geist» des Kapitalismus*と、L. プレンターノやR. トーニーのいう「資本主義精神 *Kapitalistischer Geist, capitalist spirit*」とを区別し、後者は「資本家層ないし資本主義的起業家層の心的態度」としているのに対して、前者つまりヴェーバーのいう「資本主義の「精神」」は「「資本家」(企業家)層と「賃金労働者」層、すなわち、近代経済社会の基幹部分をなす二つの社会層のいずれもが抱いている……共通の心的態度」を意味しているという [大塚 1965b: 104-5]。さらに、「資本主義精神」は、「単に「営利心」であるということにとどまらず、何よりも貨幣利得を欲求する衝動としての「営利慾」*Erwerbsgier*で

あり、とりわけ、「資本家」(ないし「企業家」)の企業活動のうちに現れる営利衝動」[大塚 1965b: 109]であるのに対して、「資本主義の「精神」」は、こうした営利衝動とは別の「エートス」であるにとらえる [大塚 1965b: 111-2]。

この「資本主義の「精神」」の説明にあたってヴェーバーは、それを古典的に包含しているフランクリンを引用しているため、大塚も「煩をいとわずにそれを引用してみる」[大塚 1965b: 120]という。しかし、煩を厭わないと宣言したにもかかわらず、大塚は、『倫理』に引用されたフランクリンのことばの最終段落部分 (*Necessary Hints to Those That Would Be Rich* に典拠がある部分) を省いて引用している。その理由を大塚は、「ここでの関連では、大して意義がないように思われるので、割愛した」[大塚 1965b: 122]と述べている。この点は忘れないでおこう。

このフランクリンに見られる「資本主義の「精神」」について、大塚は次のように述べる。

ヴェーバーのいう「資本主義の精神」は、何よりもまず、勝れた意味において一つの「エートス」として捉えられているということに他ならない。いま少し説明すれば、そこでは「営利」がそれ自体として倫理的義務であるという独自の性格をあたえられているが、そのみに止まらず、そのうちには、われわれが「倫理」とよんで何らの外的外れも生ずることのないような諸徳性もまた、はっきりと含まれているということである。[大塚 1965b: 123]

大塚は、「資本主義の「精神」」に明確にひとつの価値判断を下している。プレントナーおよびトーニーのいう「資本主義精神」を「営利衝動」として——何か非理性的で、動物的なものといったニュアンスを醸し出して——、「資本主義の「精神」」とコントラストをつけて述べ、より強く「資本主義の「精神」」が価値的にすぐれていることを表明するのである。

大塚は、こうした「勝れた意味」を「いっそう明瞭ならしめるために」、さらに *Advice to a Young Tradesman* 末尾と *The Way to Wealth* の一節を引用する。それは「資本主義の「精神」が「勝れた意味における「エートス」」であることを示すのに恰好の部分であるにもかかわらず、前者については「ヴェーバーはどのようなわけか自分の引用文ではこの部分のみを省略して」[大塚 1965b: 123] あり、後者は「全然引用していない」[大塚 1965b: 124] ところである。このようにヴェーバーに不満を述べつつ、大塚は以下のような引用をする。大塚の訳文をそのまま引用しておく。

「要するに、富裕にいたる道は、君が求めさえすれば、市場へいく道と同じくらいはっきりしている。それは主として、勤労 industry と質素 frugality, この二つの言葉にかかっている。つまり、時間と貨幣を浪費せずに、両つともできる限り善用したまえ。勤労と質素がなければ何事もだめであり、それがあれば、総てがうまくいくだろう。正直にして得られるものは残らず手にいれ、得たものは残らず節約する(必要な支出は別として)人は、必ず富裕となるだろう。——世界を統べ治め、正直な努力によって祝福を求める者の願を聴きたまう神が、ほむべき摂理のうちに、それと異なる予定をなしたまわないかぎりは」。

……

「友よ、この教えは道理であり、知恵である。けれども、勤労 industry, 質素 frugality, 周到 prudence, そうしたことは素晴らしいが、結局のところでは、君たち自身のそうした徳性に、決して頼りすぎてはいけない。というのは、そうしたものも天の祝福なしには萎み衰えるだろうから。それゆえ、謙遜にその祝福を求めたまえ。そして、現在祝福をうけていないように見える人々にも慈悲深く、彼らを慰め、助けたまえ……」。[大塚 1965b: 124]

この大塚独自の引用と、先に指摘したとおり、大塚

が「大して意義がない」として削除したフランクリンのことばを下に引用して比較してみたい。

あなたが賢明さと正直さで人々に知られているとすれば、年間6ポンドで100ポンドを使うことができる。毎日1グロート無駄使いすれば、1年では6ポンド無駄使いすることになり、それは100ポンドを使えたはずの代価となる。自分の時間を毎日1グロートの価値に相当するだけ(おそらく数分だけだろう)無駄にすれば、年間100ポンドの特権を失うことになる。5シリングの価値にあたる時間を浪費すれば、5シリングを失い、5シリングを海に投げると同じことになるだろう。5シリングを失えば、その金額だけでなく、取引で利用して稼ぐことができたはずの金額全部を失うことになるだろう。——それは、青年が高齢者になるまでに、かなり大きな額になる。[MWGI/18: 153-4=大塚訳: 42-3]

これらからあきらかなのは、大塚が引用しなかったところには、「吝嗇」あるいは「拝金主義」がありありと見られるのに対して、大塚が独自に引用したところには、フランクリンと「神」との関係がストレートに見えるということである。

さらに、折原も問題化しているが、大塚が独自に引用したフランクリンのことばの前半部分——*Advice to a Young Tradesman* 末尾——にある「予定」という訳語は、原語は *determine* であって *predestine* でも *predetermine* でもない [折原 2005a: 367] [Franklin2: 372]。ところが、それをカルヴィニズムを彷彿とさせる未来永劫の「予定」と訳したために、このフランクリンのことばは厳密に言えば自家撞着に陥ることになった。フランクリンは、善徳が「総て」「必ず」神に報われるといいながら、その「正直な努力によって祝福を求める者の願」は、神が「それと異なる予定をなし」ていれば、かなえられないと述べていることになるのである。

ここに大塚の意図ははっきり見えてくる。すなわち、フランクリンをできるだけ「拝金主義」から引

き離し、その善徳を「神」なканずくカルヴィニズムの「神」へと結びつけ宗教的に意味のあるものと位置づけようとする意図である。

このあとも、大塚は「資本主義精神」と「資本主義の「精神」」との区別をくりかえし唱え、フランクリンのことばをまたさらに引用して——大塚は、フランクリンのThe Way to Wealthを、その全文を引用して味読すべきほど重要な史料と思っているのだが、「ヴェーバーはどのような訳かこの興味深い短編に触れていない」[大塚 1965b: 133]と再度不満を漏らしつつ——、論を展開していく。大塚はヴェーバーが引用したフランクリンのことばの一部を「大して意義がない」から引用せず、また、意義があるのにヴェーバーが「どういうわけか」引用していないので、大塚が引用(あるいは参照)してみせるという仕方、大塚にとって意義のあるフランクリンへと議論を作り変えてしまっているのである。そうやって大塚が描き出そうとするフランクリンは、以下のような人物である。

倫理的諸徳目の実践の結果はかならず「貨幣利得」の形をとって現われてくるほかはなく、したがって「貨幣利得」は人々が倫理的諸徳目を現実に実践したことの果実であり、またその証明であると考えられており、そこで、その限りにおいて、「営利」そのものが倫理的義務といういでたちをとって立ち現われている、ということである。つまり、「勤労」、「質素」、「周到」等々の禁欲的諸徳性を修練によって体得し、それを現実に実践するように努めよ。そうすれば君は当然に富裕となるであろう。これに反して、もしその実践をゆるがせにするならば、君はいつまでも貧窮のうちに止まるであろう。君は義しい人だから、富裕な人にならねばならない。こういうことなのである。フランクリンのばあいには、こうした意味で、「富裕にいたる道」はとりもなおさず、「道徳的完成への道」だと考えられているのである。[大塚 1965b: 139]

見られるように、フランクリンは「道徳的完成」の求道者であり、だからこそ彼の体現している「資本主義の「精神」」は「勝れた意味における「エートス」」[大塚 1965b: 126]だと大塚は考えるのである。そして、大塚によるフランクリンの位置づけは、次の一節で「完成」する。ヴェーバーはいっさい引用していないが、大塚はフランクリンが絶賛する「「労働」の「社会」全体に対する倫理的意味が問題とされた」一文を引用した上で[大塚 1965b: 173-4]、次のように「職業労働」を位置づけるのである。

このように、それぞれの職業労働をとおして、人々は自己の生活物資を確保するとともに、他の人々に必要な或いは有用な物資を供給し、これによって最高の道徳たる隣人愛を実践することになる。[大塚 1965b: 175]

大塚が、「営利衝動」とはまったく別種の、「勝れた意味における「エートス」」を見いだしたフランクリンの「資本主義の「精神」」は、ここにキリスト教的な「隣人愛」の実践へと結びつけられるのである。フランクリンの位置づけを禁欲的プロテスタンティズムの嫡子であるかのように大きく変えてしまった大塚だが、実は、現行大塚訳の「訳者解説」では、こうした解釈はかなり後景に退いた印象を受ける。たしかに、「資本主義精神」と「資本主義の「精神」」は違うということは力説するし、「フランクリンの思想は、内容的にはまだまだピュウリタニズムないしカルヴィニズムの思想的残存物がいっぱいつまっています」[大塚 1989: 386]と、フランクリンとカルヴィニズムを結びつけはしているものの、隣人愛の実践にまで引っ張っていくことは明示的ではなくなった。しかし、だからといって大塚が自分の価値判断を放棄したということの意味するわけではない。梶山訳、それから梶山・大塚訳まではBerufは「職業」と訳されていたのだが、大塚は単独訳にするにあたり多くを「天職」と訳し直している。ここにこそ、一見後景に退いたかにみえる大塚の思想が凝縮

されたかたちで現れていると思われる。このことは後に触れることにして、以下ではフランクリンの「職業 Beruf」についての大塚の解説を見ておこう。

先に、フランクリンがカルヴィニストの父から教え込まれた聖書の句を述べている箇所を引用した。その直後は、以下のように続く。

貨幣獲得は——それが合法的な方法でなされる限り——近代の経済秩序の中では、職業 Beruf における有能さの結果であり現われなのであって、こうした有能さが、いまやたやすく分かるように、フランクリンの引用箇所だけでなく、全著作に例外なく出くわす、彼の道徳のまさしくアルファでありオメガなのである。[MWGI/18: 160-1=大塚訳: 48]

近代経済秩序において、貨幣の獲得は「職業 Beruf」における「有能さ」の結果だという行である [MWGI/18: 160]。この箇所に登場する「職業」には、梶山訳以来、訳注がつけられている。まず、梶山は以下のような訳注を付していた。

職業 (使命——原語の Beruf は職業の意と使命とを含んでいる) [梶山訳・安藤編: 95]

これが1955年に梶山・大塚訳となり、現行大塚訳となると次のような訳注に変わったのである (梶山・大塚訳と大塚訳とは若干の字句の相違があるものの、大塚による同一の解説である)。

職業 (Beruf) [後段で詳しい説明があるように、この原語は職業という意味と神から与えられた使命という意味とを含んでいる] [大塚訳: 48]

何ら変わりのない訳注のように見えるかもしれないが、これらには決定的な違いがある。父がカルヴィニストであっても、ヴェーバーはフランクリンを理神論者だと明確に位置づけていた。そうであれば、解説としては梶山のように Beruf は「使命」、つまり、

自分が選びとったものではなく、義務として、無条件に、定言的になさねばならないという意味があるという指摘にとどめるべきであろう。ところが、大塚はそこに「後段で詳しい説明がある」ような「神」との関連を指摘している。もちろん、フランクリンのいう Beruf が、「ある種の宗教的表象」と関係していることはヴェーバーもいうとおりだ。しかし、ヴェーバーがフランクリンを「暫定的な例」として選んだのは、それがカルヴィニズムの神といった特定の神を想定するものではないからだ。しかし、この大塚の訳注は、父がカルヴィニストであったこととあいまって、「後段で詳しい説明がある」ようなカルヴィニズムの神をフランクリンに読み込ませるに十分なのである。

『倫理』を解説するにあたって、大塚はヴェーバーが引用したものを削除し、ヴェーバーが引用しないものを引いてはそれを重視して、大塚の自分の知っているフランクリンに仕立てることができた。『倫理』の翻訳においても、訳文そのものはいじれないが、それでも、このような訳注によってぐっと大塚の知っているフランクリンに引きつけられたといえよう。大澤も仲正も、この訳注にぴったりそって、その意味では大塚の思想そのままに解説をしている<sup>42)</sup>。

### 3-4. キュルンベルガー『アメリカにうんざりした男』に登場するフランクリン

大塚訳に導かれるように、フランクリンにカルヴィニズムを読み込み、カルヴィニズム→資本主義の「精神」→資本主義の発展、という典型的な誤解へと、大澤も仲正も向かっている。こうしたことができるのは、単に大塚訳に導かれているからだけでなく、フランクリンその人への関心が薄弱だからであろう。実際のフランクリンはどんな人物だったのかという問いは彼らには見当たらない。いや、少なくともヴェーバーの引用しているフランクリンのことばは原典に忠実なものではなく、再構成されたものだ、という点には彼らはまったく関心を示さない。



すでに指摘したように、ヴェーバーは、フランクリンのことばをその原典から引用してはいない。この引用は、フェルディナント・キュルンベルガーの小説『アメリカにうんざりした男』[Kürnberger 1855]から孫引きするかたちでなされているのである。そのことは『倫理』の本文でも注でもしっかりと指摘されていて、ヴェーバーはわざわざ、意図的に孫引きをしている<sup>43)</sup>。その理由をヴェーバーは次のように述べていた。

この本は、芸術作品としては今日では読むにたえないものかもしれないが、しかし、それは（今日ではとくに色あせてしまった）ドイツとアメリカの感覚の対立を示す文書としては存在している。それはこうもいえるだろう。中世のドイツ神秘主義以来、ドイツのカトリックとプロテスタントに、〔その宗派が違っても〕かかわらず trotz alledem 共通している内的生活と、ピューリタンの-資本主義的行動力との対立を示す文書としては、全く比類のないものである。[MWGI/18: 154-5=大塚訳: 44]

『アメリカにうんざりした男』は、『倫理』のまず最初の読者と想定されるドイツ人には、たとえカトリックであろうがプロテスタントであろうが、みずからの「内的生活 Innenleben」と「ピューリタンの-資本主義的行動力」なるものとの違いがきわめてはっきりとわかる小説である。ヴェーバーは、フランクリンは実際どんな人物だったかを示そうとしているのではなく、「資本主義の「精神」」の説明の手がかりとして有用な小説に出てくるフランクリンを利用しているのである<sup>44)</sup>。

そうであれば、ここで必要なことはフランクリンの実像に迫ることではなく、キュルンベルガーがフランクリンをどう描いているのかをしっかりと把握することになろう。ヴェーバーは、フランクリンを孫引きした直後に次のように述べている。

これらの文章——これは、フェルディナント・キュ

ルンベルガーが才気と悪意にみちた『〔アメリカにうんざりした男——〕アメリカの文化形象』のなかで、ヤンキー主義の本人による信仰告白と呼んで嘲笑しているものと同じ文章——で、われわれに説教しているのは、ベンジャミン・フランクリンである。[MWGI/18: 154=大塚訳: 43]<sup>45)</sup>

キュルンベルガーはフランクリンを「才気と悪意」でもって「嘲笑している」とヴェーバーはいう。再度、キュルンベルガーに言及しつつ、ヴェーバーは次のようにも述べている。

(フランクリンのことばに見られる——引用者) 処世訓は、キュルンベルガーの『アメリカにうんざりした男』では「牛からは獣脂をつくり、人からは貨幣をつくる」とまとめられている [MWGI/18: 155 =大塚訳: 43]

キュルンベルガーの要約するフランクリンの処世訓は、「人からは貨幣をつくる」であった。ヴェーバーは、キュルンベルガーがフランクリンをひたすら貨幣を欲する拝金主義として描いていると紹介しているわけである。

では、実際、キュルンベルガーの書いた小説はどのようなものだったのか。ヴェーバーによるその内容の紹介はない。そこで、以下では、この小説について多少踏み込んでおきたい。

『アメリカにうんざりした男——アメリカの文化形象』[Kürnberger 1855]は、*Deutsche Bibliothek: Sammlung auserlesener Original-Romane*の第8巻に収められた、2巻本の小説である<sup>46)</sup>。ドイツ文学者の山口知三によれば、この『アメリカにうんざりした男』は、エルンスト・ヴィルコム『ヨーロッパにうんざりした人びと *Die Europamüden*』[Willkomm 1838]とともに、「19世紀ドイツのアメリカ移住問題を扱った長編小説」として「よく引き合いに出される」ものである [山口 2006: 40]。ハインリッヒ・ハイネに由来する *Europamüde* という

ことばに依拠したのが后者であり、それへの対抗として Amerikamüde を使ったのが前者である。多少長いが、山口の解説を見ておきたい。

前者（『ヨーロッパにうんざりした人びと』——引用者）が、いかにも「若きドイツ派」の作家の作品らしく、ウィーン会議後の王政復古の支配するドイツ社会の閉塞状況を若い世代の眼で批判的に描き、新しい生活の建設を求める若者たちがヨーロッパに見切りをつけて、アメリカに向けて旅立つところで終わっているのに対して、後者（『アメリカにうんざりした男』——引用者）は、前者と同じく一八三〇年代の物語という設定になっていて、「新世界」アメリカに絶大な期待を抱いてアメリカに渡った青年貴族（詩人ニコラウス・レーナウがモデル）が、アメリカ社会にはびこる拝金主義や悪辣な詐欺まがいの営利主義、さらには、先住民や黒人に対するだけでなく、白人の間でもリンチ殺人にまでいたるほどに苛烈な人種差別などにすっかり幻滅して、ほうほうの態でヨーロッパに帰る船に乗り込むまでを描いた長編小説である。つまり、この二つの作品は、アメリカへの憧れと幻滅という十九世紀ドイツの「アメリカもの」文学の二つの相反する主たる特徴を、一方はヨーロッパから脱出してのアメリカへの船出で、他方はアメリカから逃げ帰るヨーロッパへの船出でしめくくるといふ単純明快にして露骨きわまる小説構成で提示し、かつ、そのことを題名でも誇示している点で、例として挙げるのに恰好な組合せなわけである。[山口 2006: 40-1]

キュルンベルガーの小説は、19世紀のドイツにとつてのアメリカというひとつの像 Gebilde, それも「憧れ」であったアメリカが「幻滅」に転じた像を示している。そうした小説からフランクリンを孫引きしているのだから、ヴェーバーのねらいは、フランクリンが「憧れ」ではなく「幻滅」として描かれているところを示すことにあることは容易に推測できる。

さて、このフランクリンが登場する小説『アメリカにうんざりした男』について、もう少しその内容について吟味しよう。

この小説は、主人公モーアフェルト Doktor Moorfeld が期待に胸ふくらませて、アメリカのニューヨークに渡るところからはじまる。アメリカという地に降り立ったモーアフェルトは、まず最初に訪れたバッテリー・パークで、アメリカの現実におつかり、そのひとつひとつに「ヨーロッパ人」あるいは「ドイツ人」としての驚きを隠さない姿が描かれていく。小説冒頭から、アメリカが「憧れ」ではなく「幻滅」となることを予感させる。

このモーアフェルトは、ある少女と出会う。その少女は、モッキンバード Mockingbird という人物のコモン・スクール common-school を探しているのだが、誰もその少女に手を貸そうとしない。懇願されたモーアフェルトは、この少女をつれて、ともにモッキンバードのコモン・スクールへと向かった。モッキンバードは、実は数週間前に鯨油取引で失敗して財産を失い、すぐにコモン・スクールをはじめたものの、思うような収入を得ることはできず、玉ねぎを売って不足分をまかなっているという、なんとも奇妙な人物なのだった。

モーアフェルトはモッキンバードをいぶかしく思いつつも、コモン・スクールで行われる授業を見ることになった。彼が見たのは、9歳から12歳の男子児童が60人から80人いる教室で、なぜ建物が丸ではなく四角形（長方形）なのかという問いに対して、教師と子供たちが会話と実践のなかからいっしょに答えを見つけていくという授業だった。児童たちは、建物に限らず、ベッドも机も長椅子も様々なものが四角であることを発見していく。これは要するに、合理性を知る授業ということなのだろう。

この授業を見て、モーアフェルトはモッキンバードの評価を変えることになった。とても教育者とは思えなかったはずのモッキンバードに、モーアフェルトは賛辞を送ったのである。しかし、それに対してモッキンバードは「これはドイツ形而上学ではな

いのです」[Kürnberger 1855: 19]と、切り捨てるように応じ、すぐさま子供たちに、フランクリンの Advice to a Young Tradesman——キュルンベルガーの小説のなかでは „junge Gewerbsleute“ と表記されている——から抜き出された一節 Bruchstück を読むように告げる。ここで、子どもたちに読ませたものが、『倫理』に孫引きされたフランクリンの文章なのである。

これは、キュルンベルガーの小説のなかで Advice to a Young Tradesman からの文章だと書かれてはいるが、すでに触れたように、Advice to a Young Tradesman および Necessary Hints to Those That Would Be Rich というふたつのテキストを、その区別もないまま、また、後に不正確で恣意的だと批判されるようなかたちに再構成した文章である。キュルンベルガーはこの再構成にあたり、フランクリンの Advice to a Young Tradesman から「神」にかかわる末尾の文章を削除し、Necessary Hints to Those That Would Be Rich から、拝金主義を彷彿とさせる文章を引いて結合させている。この再構成されたフランクリンのことばは、まさしく「宗教的なものへのあらゆる直接的な関係から切り離され」ており、ヴェーバーがわざわざ孫引きをした理由のひとつはここにある。

さて、この朗読が終わり、「その人(フランクリン——引用者)は、生活を少しばかり神経質に考えている」[Kürnberger 1855: 21]と述べたモーアフェルトだったが、彼には、この「アメリカ的規律の章 Bruchstück」は受け入れがたかったようである[Kürnberger 1855: 21]。そんな様子を察知したのか、先ほどはモーアフェルトからの授業への賛辞に、さらりと「ドイツ形而上学ではありません」と切り返したモッキンバードは、今度は「そう書いているのは、ベンジャミン・フランクリンそのひとです」[Kürnberger 1855: 21]とやってのけたのである。避雷針をつくった立派な発明家・科学者であり、また、善徳に生きた理想の人物であるはずのフランクリンを、アメリカではその点についてはいっ

さい目もくれず、拝金主義的な俗物のように取りあげ、それも子どもにそれを教え込んでいる。ここから、モーアフェルトは嫌悪感を抱いたであろうことは十分予想できる。そして、彼はこう答えるのである。

私は、あなたがベンジャミン・フランクリンという評価の高い人の名前を挙げたことには大変感謝しています。この人は、少なくとも銀行でよりも学問でより多くのものを残していて、彼固有の生き方によって、あの著作のなかで、人の志に求められる理想よりさらに高い理想を打ち立てました。人間が生きていくことをシリングとポンドという貨幣に換算することは、避雷針の発明によってはじめて、私たちに許しを請うことができるでしょう。それがなければ、私たちの使命は牛からは獣脂をつくり人からは貨幣をつくることだ、としてしまうほど我を忘れた者の教義を、私たちは自分たちのものとして受け入れなければならなくなってしまう。未熟な人びと Volk はしばらくの間はこの見解のもとにいななければならないでしょうが、しかし、成熟した人びと Volk はこういいます。人からは精神がつくられるのであって、お金ではありません。と。[Kürnberger 1855: 21]

学校を去ろうとするモーアフェルトに、さらに追い打ちをかけるように、モッキンバードの補助教員ベンターが出口で手を握り、感動した様子でこうささやく。すなわち、「あなたのドイツ人らしいことばに感謝します。」[Kürnberger 1855: 22]と。フランクリンの徳や善行などを賞賛するのは現実社会を見ていない「ドイツ形而上学」のようなものであり、いまだにドイツ人はそんな理想を語っているのかと補助教員ベンターまでモーアフェルトを小馬鹿にするわけである。

ここに「ヨーロッパ人」なかんずく「ドイツ人」であるモーアフェルトが、フランクリンに対してどのような思いを持っているのかが明瞭に現れている。すなわち、モーアフェルトにとって、フランクリンは避雷針を発明するなど科学的分野でも高く評価す

べき人物であり、かつ、その徳や善行からフランクリンは理想とすべき人物だった。しかし、あえて拝金主義であるように構成されたフランクリンのことばから、アメリカがいかにも俗物的で、拝金主義なのかをモーアフェルトは思い知らされる。キュルンベルガーの小説で引用されているフランクリンのことばは、「憧れ」から「幻滅」とへと変化したものとして浮かび上がってくるのである。

さて、以上はこの小説の冒頭部分のストーリーである。モッキンバードなるアメリカ人が、フランクリンの章句をわざわざ再構成して拝金主義的にしつらえた上で子どもに読ませているという場面が描かれている。ヴェーバーは、ここに現れるフランクリンの引用を、ほぼそのまま『倫理』に孫引きしているのである。

### 3-5. 貨幣獲得と倫理の同時存在

キュルンベルガーの描くフランクリン——「牛からは脂をつくり、人からは貨幣をつくる」——は、「憧れ」から「幻滅」への転換を示すものだった。たしかに、フランクリンには、拝金主義となる「功利的な傾向 *utilitarisch gewendet*」は存在する。それは、「フランクリンの道徳的訓戒」は正直、時間の正確さ、勤勉、節約などすべてが信用を生むから善徳であるという「功利的な傾向」がある [MWGI/18: 157=大塚訳: 46] からだ。そのため、有益であるという功利的な基準から同一効果を生むのであれば、その善徳の内実は問われず、善徳の「外観」を代用するだけで十分だという「功利主義 *utilitarismus*」になってしまうことも十分考えられる [MWGI/18: 157-8=大塚訳: 46-7]。モーアフェルトは、こうしたフランクリンにある「功利的傾向」が「功利主義」へと転落した様子を目の当たりにしたということになっているわけである。

ドイツ人がアメリカニズムの善徳に「偽善」を感じてきたのは、あきらかにこれだと指摘できそうにも見える。[MWGI/18: 158=大塚訳: 47]

善行、徳行も形骸化してしまった「功利主義」の信奉者としてステレオタイプ化されたアメリカ人へ、ドイツ人が「偽善」を感じるまさにそうしたものにフランクリンはなっている。

しかし、ヴェーバーはここで、「実際のところ、ことは決してそう単純ではない」[MWGI/18: 158-9=大塚訳: 47] と、キュルンベルガーの展開する筋から離れてフランクリンを見ようとする。フランクリンは、キュルンベルガーのように——アメリカニズムに「偽善」を感じるドイツ人のように——「功利主義」と片付けるわけにはいかないのである。

……（フランクリンのことばに見られる——引用者）処世訓は、キュルンベルガーの『アメリカにうんざりした男』では「牛からは獣脂をつくり、人からは貨幣をつくる」とまとめられているが、この「吝嗇の哲学」の特異さは、信用のできる誠実な人という理想、とりわけ、自分の資本を増加させることを自己目的とすることが各人の義務だという思想 *der Gedanke der Verpflichtung des einzelnen gegenüber dem als Selbstzweck vorausgesetzten Interesse an der Vergrößerung seines Kapitals* である。[MWGI/18: 155=大塚訳: 43]

ヴェーバーはフランクリンには「信用のできる誠実な人という理想」、「自分の資本を増加させることを自己目的とすることが各人の義務だという思想」というふたつの側面が見られるという。フランクリンに「吝嗇」「拝金主義」を読み取ることができたとしても、それに尽きることなく、フランクリンは倫理的であり善徳そのものをも求めていたことをしっかり指摘している。以下に整理してみよう。

正直、勤勉、節約は、信用を生み、貨幣を獲得できるという有益性の観点からなされるものであって、まさに形式的に善徳を行いさえすればそれでいいという「功利的傾向」をフランクリンに見ることはできる。しかし、フランクリンにそうした功利的傾向があるとはいえ、それは功利主義的な自己中心的原

理を善徳で粉飾しようとしているわけではなかった [MWGI/18: 159=大塚訳: 47]。彼には、「功利的傾向」はあったものの、それは形骸化して「功利主義」そのものへと転化してはならず、依然としてフランクリンは「倫理的」なのである。

他方で、いっさいの自然の享楽を厳しく却けてひたむきに貨幣を獲得することを「最高善」とするフランクリンは、「快樂主義」とも「幸福主義」とも縁遠く、むしろそれらからすれば「非合理的なもの」として、ただただ貨幣獲得が自己目的化していたとヴェーバーは述べている [MWGI/18: 159-60=大塚訳: 47-8]。すでに引用したように、フランクリンに、なぜ「人から貨幣をつくら」なければならないのかを問うと、その答えとして、彼は聖書の句——『箴言』第22章第29節——を引いて答えた [MWGI/18: 160=大塚訳: 48]。理神論者であり宗教的なものとの直接的な関係がない彼が、聖書の句で貨幣獲得を義務とする理由を答えるということは、つまり、フランクリンの貨幣獲得は拝金主義といった俗物とは異なり、無条件に、定言的になされるべきものということの意味しよう。

以上から、ヴェーバーは、フランクリンは「信用のできる立派な人という理想」も、「自分の資本を増加させることを自己目的と考えるのが各人の義務だという思想」も、そのことばのとおり、ふたつながら追求している人物としてここに「例示」しているということが見えてくるだろう<sup>47)</sup>。あえてキュルンベルガーから孫引きして、読者にいったんはその「吝嗇」「拝金主義」に嫌悪感を抱かせておき、しかし、それでは片づけられないのだと反転してみせる手法によって、それがより強く印象づけられることになる。そして、この「貨幣獲得」を自己目的化しながら「倫理的」でもあろうとするふたつが結びつくところ——折原の言葉を借りれば「貨幣増殖と倫理との希有の癒着」[折原 2005a: 285]があるところ——が、まさしく「職業」なのである。

(以下続く)

## 凡例

ヴェーバーからの引用は、『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe*を底本とする。略号は『全集』とし、参照ページを記載する際の略号としてMWGを使い、そのあとにAbteilungをローマ数字で、Bandを算用数字で示す。

『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe, Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)*

MWGI/7: *Zur Logik und Methodik der Sozialwissenschaften : Schriften 1900-1907*, herausgegeben von Gerhard Wagner in Zusammenarbeit mit Claudius Härpfer, Tom Kaden, Kai Müller und Angelika Zahn, 2018 [— Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis = 1998 富永祐治・立野保男訳、折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店、折原補訳と略記]。

MWGI/9: *Asketischer Protestantismus und Kapitalismus, Schriften und Reden 1904-1911*, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2014 [— Die protestantische Ethik und „Geist“ des Kapitalismus = 1994 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未來社、『倫理』初版と略記、また、訳本については梶山訳・安藤編と表記、—Antikritisches zum „Geist“ des Kapitalismus = 1980 住谷一彦・山田正範訳『資本主義の「精神」に関する反批判『思想』No. 674.]

MWGI/18: *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus, Schriften 1904-1920*, herausgegeben von Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Ursula Bube, 2016 [— Die protestantische Ethik und Geist des Kapitalismus = 1989 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、『倫理』初版との差異を示す際には『倫理』改訂版と略記、また、訳本については大塚訳と表記]

MWGI/22-2: *Wirtschaft und Gesellschaft, die*

Wirtschaft und die gesellschaftlichen Ordnungen und Mächte. Nachlaß, Teilband 2: Religiöse Gemeinschaften, herausgegeben von Hans G. Kippenberg in Zusammenarbeit mit Petra Schilm unter Mitwirkung von Jutta Niemeier, 2001. = 1976 武藤一雄・藪田宗人・藪田坦訳『宗教社会学』創文社

なお、この本稿(3)では、『倫理』について、以下の日本語訳にも言及している。梶山・大塚訳、と略記する。

梶山力・大塚久雄訳 1955-62 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 上・下』岩波書店

フランクリンの原典に関しては、以下の『フランクリン著作集』を使用する。参照ページを記載する際の略号として、Franklinのあとに巻数をアラビア数字で示す。

『フランクリン著作集』Smyth, A., Henry ed., 1970, *The writings of Benjamin Franklin: Collected and Edited with a Life and Introduction.*, New York, Haskell House.

Franklin1: Volume I. [— The Autobiography = 1957 松本慎一・西川正身訳『フランクリン自伝』岩波書店、『自伝』と略記]

Franklin2: Volume II. 1722-1750. [— Advice to a Young Tradesman, Hints to Those That Would Be Rich.]

## 注

33) これまで本誌『立命館産業社会論集』第55巻第2号、第3号に示してきた本稿の目次について、変更を加えることにする。すなわち、当初「3. 資本主義の「精神」とルターの職業概念——鍵概念の検討」としたところを、「3. 資本主義の「精神」——鍵概念の検討(1)」と「4. ルターの職業概念——鍵概念の検討(2)」とに分割する。これに伴い、それ以降の章番号がひとつずれることになる。本稿は『倫理』を包括的に取り扱うものではなく、本稿の課題に対して必要十分な限りの論

述にするという方針自体に変更はない。しかし、「資本主義の「精神」」についての考察には想定以上に紙幅がかさみ、当初目次では全体のバランスを欠くことが懸念されるため、以上のような変更を加えることとした。なお、あわせて以下の訂正もしておきたい。本誌第55巻第2号掲載の本稿(1)の1の表題について、本文(18ページ)の「1. 『倫理』の問題設定」には「に対する誤解」が脱落している。「目次」(17ページ)に記した「1. 『倫理』の問題設定に対する誤解」が正しい。

34) 引用中の、「近代資本主義精神」は、初版では「資本主義精神」であった[MWGI/9: 420 = MWGI/18: 484 = 梶山訳・安藤編: 355]。

35) 「資本主義の「精神」」およびルターの職業概念については、折原浩の詳細な研究が存在する[折原 2003][折原 2005a][折原 2005b]。本稿は、『倫理』は何を問うているのかをあきらかにすることを目的としており、折原の研究に屋上屋を架すことようなことは避けて、本稿の目的に必要な限りで『倫理』第1章第2節および第3節を検討する。

なお折原のこれらの研究は、羽入 2002への批判によって生み出されたものであった。私はすでに折原によって精緻になされた羽入批判を繰り返すつもりはない。むしろ、折原の研究は羽入批判という文脈に置かず、『倫理』を誤解から解放しながら、その解説を展開していったものととらえる。しかし、そうとらえてみると、折原のこれらの研究が世に送り出されて10年以上が経つ現在にいたるまで、依然として誤解、誤読がうち続いていることにあらためて気付かされるのである。

36) こうした態度は、ヴェーバーには珍しいことではない。『経済と社会』第2部に収められた「宗教社会学」草稿では、その冒頭で以下のように述べている。

宗教とはなに「である」かを定義することは、以下の論述の結末においてなら可能であるかもしれないが、冒頭からこれを行うことは不可能である。[MWGI/22-2: 121 = 宗教: 3]

37) さしあたり、「理想型」構成についての折原の解説を参照[折原 1981: 90-6]。

- 38) この引用箇所、「同時に」以降最後までは、改訂に際して加筆されたものである。
- 39) こうした批判は『倫理』初版の段階からなされた、いわば古典的な批判である。その最近の例は注47で触れるが、最初にこの手の批判をした人物のひとりにはブレンターノである。ブレンターノは、ヴェーバーの描くフランクリンは、まさに「真実に反するもの」[Brentano 1916: 150=211]であり、それを正すべく、ヴェーバーの引用しないフランクリンの文章を繰り返し使い「フランクリンは信仰心のあついキリスト者ではなくとも、キリスト教倫理学 die Morallehren Christi を最も完全にとらえた精神の持ち主であった。」[Brentano 1916: 150=210] (傍点は引用者)と位置づける。たしかに、ブレンターノの、自分の知っているフランクリンと違うのだろうが、これはヴェーバーの「理念型」としてのフランクリンという設定を無視した批判であり、誤解以外の何ものでもない(ヴェーバーが『倫理』改訂時につけた注を参照[MWGI/18: 161=大塚訳: 50])。なお、橋本は、「ブレンターノによれば、フランクリンは、貨幣獲得を自己目的としたのではなく、よりよき未来に向けて、他人に親切にすることを善とみなした」[橋本 2019: 304]という。翻訳の文章を恣意的に切り貼りした不正確な一文だが、ともかく、ブレンターノの誤解を無批判に受け入れ、それにもとづけば、「『プロ倫』のテーゼは、これまでとは異なる特徴を持つことになる」[橋本 2019: 304]という。なぜ誤解を持ち込むと『倫理』の新たな読みになるのか、まったく理解に苦しむ。
- 40) なお、この「聖書の句」である『箴言』第22章第29節の訳は、大塚訳によった。新共同訳では、「技に熟練している人を観察せよ。彼は王侯に仕え怪しげな者に仕えることはない。」となっている。また、いわゆる岩波委員会訳では「仕事のすばやい人を、お前は見たか。彼は王たちの前に進み出る。」[並木・藤村訳: 266-7]としたうえで、「すばやい」について、ここでは「器用な仕事をする職人に関して用いられている」[並木・藤村訳: 267]と解説している。
- 41) 大塚は、大塚 1943, 1944, 1946の副題にもあった「生産力」ということばを、戦後ヴァージョン

[大塚 1965b]では本文もあわせて「生産倫理」に変更している。この変更に注目し、戦時から戦後への大塚の思想をとらえた研究に中野 2001がある。そこで中野は、アジア太平洋戦争に時機を見だし、近代人批判とともに動員の思想を展開した大塚が、それを戦後にも姿を変えて持ち込んでいることをあきらかにしている[中野 2001: 21-90]。本稿では、こうした中野 2001の研究をふまえても、大塚 1943, 1944, 1946にまでは遡らず、引用はすべて大塚 1965b から行うことにする。

- 42) この点、橋本は彼独自の路線を突っ走っている。橋本は、カルヴァン派、敬虔派、メソジスト派を見てきたところで「救済の証しについての整理」なる表[橋本 2019: 189]を作り、フランクリンを「イギリス」の「メソジスト派」に位置づけて、次のようにいう。

ベンジャミン・フランクリンは、メソジスト派の父から影響を受けたとされるので、部分的にはメソジスト派を継承したともいえる。[橋本 2019: 189] (傍点は引用者)

どうやら橋本は、メソジスト派に重きを置こうとしているようで、そうした無理筋に何としてでももっていこうと、牽強付会な「整理」をしているのだろう。というのも、別の箇所では橋本は「彼(フランクリン——引用者)の父はカルヴァン派のプロテスタント」[橋本 2019: 304] (傍点は引用者)と書いていて、フランクリンの父はいつのまにか「改宗」させられているからである。

- 43) キュルンベルガーの小説に現れるフランクリンのことばは、もちろんキュルンベルガーによる訳文である。ヴェーバーはそれを孫引きするにあたって、フランクリンの原典を参照して、その訳文を「修正した korrigiert」ことを『倫理』の注で明記していた。

なお、キュルンベルガーはフランクリンの冊子をいくらか自由に翻訳しているが、ここでは原典にあわせて修正しておいた。[MWGI/18: 154=大塚訳: 44]

その修正の詳細については、指摘として不十分なところもあるが『全集』につけられた注を参照 [MWGI/18: 151-4]。大塚訳では、上記の注のひとつ前の注——翻訳の関係上、大塚訳では上記の注の後に配置されている——は、以下のように訳され、また、訳注まで付されて、あたかもフランクリンの文章をヴェーバーが訳しているかのような印象を与えている。

最後の章句は Necessary hints to those that would be rich (1736) から、その他は An Advice to a Young Tradesman から訳出。〔前注にみえるような著者の指摘 (キュルンベルガーの翻訳をヴェーバーが修正した——引用者) にもかかわらず、細かい点ではなおある程度の意識がみられる。が、さしつかえない限り、原文に即して邦訳しておいた〕。〔大塚訳: 44〕 (傍点は引用者)

この注のドイツ語原文に、「訳出」にあたる語はいっさいない。原文では aus が使われて、どこから引用されているかが示されるのみである (ちなみに、梶山訳の段階では、「訳出」という語は補われていなかった [梶山訳・安藤編: 92])。

- 44) ヴェーバーがフランクリンを間違ってとらえている、引用がおかしいと指摘されることはあっても、これが孫引きであることの重要性にはほとんど注意が向けられてこなかった。管見の限りでは、折原浩だけが「ヴェーバーは、その箇所 (フランクリンのことば——引用者) をわざわざ、「原典」からではなく、F・キュルンベルガーの『アメリカにうんざりした男 Der Amerikamüde』から孫引きしている。〔折原 2005b: 227〕と明確に指摘し、踏み込んだ論究をしている [折原 2005a: 225] [折原 2005b: 227]。
- 45) この引用のなかで「同じ文章」と訳したのは、原文では直前にある Sätzen を受けた den gleich (3格) である。この箇所は、梶山訳ではフランクリンの「この文章は」を主語として、キュルンベルガーの文章と「同一」であると訳され [梶山訳・安藤編: 91]、梶山・大塚訳でも同じく「この文章は」が主語で、「同一のもの」であると訳され

ていた [梶山・大塚訳 上: 42]。ところが、大塚訳になると、主語が「これは」となり、「同一の」は消されてしまった [大塚訳: 43]。梶山訳から梶山・大塚訳までは、ヴェーバーが孫引きをしたことが端的に示されていたのだが、現行大塚訳ではそれがわからなくなってしまっている。

- 46) 本書には、大澤隆幸による日本語訳 (部分訳) が存在する。訳出にあたり、適宜参考にした。
- 47) たとえば、山本通は、「フランクリンを「資本主義の精神」の体现者として一面的に捉えるヴェーバーの見方は、ほとんど全てのフランクリン研究者の批判的となっている。〔山本 2017: 28〕と、ヴェーバーの描くフランクリンの不当さ、不適切さが衆目の一致するものだとしている。そうしたヴェーバーの不適切なフランクリン像を却けるべく、山本はフランクリンの生涯、宗教、道德観、彼のなした数々の業績などを縷々述べて [山本 2017: 30-58]、「フランクリンが工業化社会の推進力としての「産業的啓蒙」の体现者であったこと」 [山本 2019: 29] をあきらかにするという。そして、最終的に山本は次のように述べる。

……彼 (ヴェーバー——引用者) のいう意味での「資本主義の精神」はフランクリンにおいては存在しなかった。それだけではなく、他のどのような思想家や科学技術者にも見られないであろう。それが、もし存在したとすれば、それは、資本主義が体制的に確立したのちに、経営者や労働者が資本主義のシステムに対応せざるを得なくなったために、生まれきたのである。資本主義を成立させた主たる精神的原動力は「産業的啓蒙主義」のエートスなのであり、「資本主義の精神」ではなかった。〔山本 2017: 59-60〕

山本も残念ながら、『倫理』を資本主義生成論、資本主義発展論だと思っているようである。その点はおくとして、山本が自身の責任において調査、検証することによって、フランクリンを「産業的啓蒙主義」のエートスの体现者とし、そのエートスが「精神的原動力」となって資本主義を成立させた、と主張することは、それはそれとして吟味



され、その当否が論じられなければならないことである。つまり、山本のフランクリンと資本主義の成立をめぐる歴史叙述は、ヴェーバーとは別の、山本独自の観点からなした歴史叙述であり、山本の描いた歴史がどんなに説得力を持ったとしても、それを理由に、『倫理』で示されたフランクリンの理念型が不適切であるということにはならないのである。それはヴェーバー自身がはっきりいっているとおりである。

これらの観点（これについてはもっと説明しなければならないだろう）が、われわれが観察している歴史的现象を分析できる唯一可能な観点だというわけでは決してない。あらゆる歴史的现象についてそうであるように、観点を異にすれば別の特徴が「本質的」となるのである。  
[MWGI/18: 150=大塚訳: 39]

ヴェーバーは、彼が『倫理』で示したフランクリンが、唯一の、正しいフランクリンだなどと主張してはいない。むしろ、様々な観点からフランクリンをとらえるのであり、ヴェーバーとはまったく違うフランクリン像を構成することもできる。ヴェーバー自身がそういっているのである。

山本がフランクリンに「産業的啓蒙主義」を見いだそうとする叙述には、学ぶべきものが多くあるだろう。もちろん、山本の論考に限らず、フランクリンにかんする先行研究から、われわれは大きな恩恵を受けている。しかし、それはそれとして、ヴェーバーは彼独自の観点から、フランクリンを「理念型」として描いている。それでも、山本は次のように批判の手を緩めない。

ヴェーバー学者たちは言うかもしれない。「ヴェーバーはフランクリンを研究したのではなく、フランクリンの著作を利用して『資本主義の精神』という理念型・モデルを構築したのだから、それがフランクリンの実像と乖離していても構わないのだ」と。これは容認される弁明だろうか。歴史研究者たちによって次第に明らかになってきたフランクリンの実像とは全く異なる空想上の「資本主義の精神」の理念型が、

また同じく実像とかけ離れた空想上の「プロテスタンティズムの倫理」という理念型と親和関係があるとか、後者が前者の「母胎」であるとか論じることは、社会科学的に何の意味も無いのである。[山本 2017: 29]

山本は自分の知っているフランクリン——実像が示された、正確な、間違いのないフランクリン——とはちがう像が『倫理』に描かれることをもって、それを「何の意味も無い」と断じるわけである。

しかし、こうした山本の批判をすでにヴェーバーは予見していたかのように以下のとおり述べている。ヴェーバーはまず、歴史的存在の「客観的」事実を「無前提」に模写すべきでありそれが可能だと考える者にとっては、理念型はまったく無意味なものと思えるだろうという[MWGI/7: 206=折原補訳: 116]、さらに、そうした「無前提性」などありえず、どんなものであれ「意義」との関係に、つまり、当人の「価値理念」にかかわらせてのみ「科学的な意味」があると思う人ですら、理念型という「ユートピア」を危険視し、「遊び Spielerei」と見なすだろう[MWGI/7: 206=折原補訳: 116-7]。山本のように、理念型に対して「何の意味も無い」という批判がなされることは、ヴェーバーにとっては想定範囲内のことであったようである。ヴェーバーはさらに次のようにいう。

実際のところ、それがまったくの思想の遊び Gedankenspiel なのか、それとも、科学上有益な概念構成であるのかは、けっして先験的には決められない。ここでもまた、ただひとつの規準、すなわち、具体的な文化現象を、その連関、因果的制約性、および意義において認識することにたいする、その効果という規準があるのみである。[MWGI/7: 206=折原補訳: 117] (折原補訳では、「それとも」に傍点がふられているが、それに相当すると思われる oder はゲシユベルトにはなっていない)

あまりに明確かつ確にヴェーバーが述べているので、これ以上私が付け足すこともない。ただ、

補足的かつ具体的に、少しばかり述べておきたい。たとえば、監視社会の問題を考察するために、G. オーウェルの小説『1984』から理念型を構成してみせることは、それが小説という「空想」に過ぎないから「何の意味も無い」と断じていいだろうか。ある種の力を物体や記号が保持、象徴することを端的に理解させるために、テレビ番組『水戸黄門』で使われる「水戸黄門の印籠」を理念型として提示することは、実証研究のあきらかにする「実際」の水戸光圀とかけ離れた「空想」にすぎないから「何の意味も無い」といえるのだろうか。「資本主義の「精神」」の説明のための有益な手がかりとして、キュルンベルガーの小説『アメリカにうんざりした男』に登場するフランクリンを理念型として提示することは、専門研究があきらかにした「実際」のフランクリンとかけ離れた「空想」にすぎないから「何の意味も無い」のだろうか。

## 文献

- 大澤真幸 2019 『社会学史』講談社
- 大塚久雄 1943 「マックス・ウェーバーに於ける資本主義の「精神」(一)——近代社会に於ける経済倫理と生産力 序説」『経済学論集』, 第13巻第12号
- 大塚久雄 1944 「マックス・ウェーバーに於ける資本主義の「精神」(二)——近代社会に於ける経済倫理と生産力 序説」『経済学論集』, 第14巻第4号
- 大塚久雄 1946 「マックス・ウェーバーに於ける資本主義の「精神」(三)——近代社会に於ける経済倫理と生産力 序説」『経済学論集』, 第15巻第1号
- 大塚久雄 1964 「マックス・ウェーバーにおける資本主義の「精神」(1)」『経済学論集』, 第30巻第3号
- 大塚久雄 1965a 「マックス・ウェーバーにおける資本主義の「精神」(2)」『経済学論集』, 第30巻第4号
- 大塚久雄 1965b 「マックス・ウェーバーにおける資本主義の「精神」」大塚久雄他『マックス・ウェーバー研究』岩波書店
- 大塚久雄 1989 「訳者解説」大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店
- 折原浩 1981 『デュルケムとウェーバー 上』三一書房
- 折原浩 2003 『ヴェーバー学のすすめ』未來社
- 折原浩 2005a 『学問の未来——ヴェーバー学における末人跳梁批判』未來社
- 折原浩 2005b 『ヴェーバー学の未来——「倫理」論文の読解から歴史・社会科学の方法会得へ』未來社
- 中野敏男 2001 『大塚久雄と丸山眞男——動員、主体、戦争責任』青土社
- 仲正昌樹 2014 『マックス・ウェーバーを読む』講談社
- 並木浩一・勝村弘也訳 2004 『旧約聖書 XII ヨブ記 箴言』岩波書店
- 橋本努 2019 『解説 ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』』講談社
- 羽入辰郎 2002 『マックス・ウェーバーの犯罪——「倫理」論文における資料操作の詐術と「知的誠実性」の崩壊』ミネルヴァ書房
- 山口知三 2006 『アメリカという名のファンタジー——近代ドイツ文学とアメリカ』鳥影社
- 山本通 2017 『禁欲と改善』見洋書房
- 渡辺利雄 1980 『フランクリンとアメリカ文学』研究社出版
- Brentano, Lujo, 1916, *Die Anfänge des modernen Kapitalismus: Festrede gehalten in der öffentlichen Sitzung der K. Akademie der Wissenschaften am 15. März 1913*, München, K. B. Akademie der Wissenschaften. (=1941 田中善次郎訳『近世資本主義の起源』有斐閣)
- Kürnberger, Ferdinand, 1855, *Der Amerika-Müde: Amerikanisches Kulturbild*, in *Deutsche Bibliothek: Sammlung auselesener Original-Romane.*, Frankfurt a. M., Verlag von Meidinger Sohn & Cie. (=2010 大澤隆幸訳「キュルンベルガー著 アメリカにうんざりした男(1)」静岡県立大学国際関係学部『国際関係・比較文化研究』第9巻第1号)
- Willkomm, Ernst, 1838, *Die Europamüden: Modernes Lebensbild*, 2 Bde., Leipzig, Julius Wunders Verlags-Magazin.

Max Weber and “Modern Culture” :  
The Research Question of His Protestant Ethic Article (3)

MITOMA Toshiyuki<sup>i</sup>

**Abstract** : The “*Spirit of Capitalism*” that appears in Weber’s Protestant Ethic article’s section 2, chapter 1 is not provided with its definition, because it is a specific “*historical individual*” and also a “genetic” ideal type. Instead of its definition, Weber gave a provisional illustration of the case of Benjamin Franklin and this has resulted in several misunderstandings. Though Weber’s Franklin is a person detached from any direct connection to religious belief, Hisao Otsuka who was the Japanese translator of the Protestant Ethic article emphasized the connection between Franklin and religion, especially Calvinism. He evaluated Franklin’s “*Spirit of Capitalism*” as an excellent ethos and connected it to neighborly love. One of the reasons why this kind of misunderstanding has been repeated is explained below. Weber quoted Franklin’s words from Ferdinand Kürnberger’s novel *Der Amerika-Müde*. That means Weber quoted them at second hand, but this fact has been overlooked. Kürnberger deleted references to religion in Franklin’s words and represented him as a money worshiper. Weber quoted this version almost exactly and asserted that it showed the idea of a credit-worthy man of honor and the idea of the duty of the individual to increase his wealth.

**Keywords** : Weber, Protestant Ethic article, protestantismus, calvinism, Franklin, Spirit of Capitalism, historical individual, ideal type, Kürnberger

---

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University